Book Review 24-16 歴史　＃海風

『＃海風』（今野敏著）を読んでみた。著者は北海道生まれ。『隠蔽捜査』で吉川英治文学新人賞、『果断 隠蔽捜査 2』で山本周五郎賞と日本推理作家協会賞、「隠蔽捜査」シリーズで吉川英治文庫賞、日本ミステリー文学大賞を受賞。著書多数。空手道塾を主宰する武道家でもある。

本書は、明治政府を創った者たちの歴史観（薩長史観）に一石を投じるものである。黒船来航から米国への使節団派遣までの幕府の試みを活写している。
1853 年 6 月に浦賀に 4 隻の黒船が出現する。艦隊司令長官・ペリーは 63 門の大砲を江戸に向けて日本に開国を迫る。幕府内は攘夷か、開国かの対応に苦慮していた。清国が英国との戦争に敗れて屈辱的な目に遭っていることも知っている。そこで、老中首座の阿部伊勢守正弘は、優秀な若者 3 名を、幕府の対外政策を担う海防掛に抜擢する。

本書には、幕末に活躍した明治の英傑は出てこない。勝海舟が無能な人材として描かれているだけである。日頃、勝ち組の歴史観に満ち溢れた情報に晒されているが、重要な転換期に幕府方の者たちも、ロシアや欧米に果敢に立ち向かったということを示す幕末外交小説である。

ここで歴史を振り返ってみよう。
黒船来航は、1853 年にペリーが艦船 4 隻で来航した事件。米国大統領国書が幕府に渡され、翌年に日米和親条約が締結。来航翌日には、浦賀には見物人が集まり始め、翌々日には江戸からも見物客が殺到した。このときの様子をして「泰平の眠りを覚ます上喜撰たつた四杯で夜も眠れず」という狂歌が詠まれた。
来航理由としては、当時の米国捕鯨船は船上で鯨油の抽出に、大量の薪・水が必要であり、長期航海用の食料も含め、太平洋での補給拠点が求められていた。加えて漂流民の保護は当時の海軍の任務のひとつであり、難破した米国捕鯨船乗組員を受け取るために長崎に来航している。
それから、1848 年に戦争で太平洋岸のカリフォルニアを獲得し、巨大市場である清との海を渡っての貿易開拓が国家目標となった。**その**最短航路は、西海岸から北上し、**その後**南下して津軽海峡、対馬海峡**を**通過して**上海**付近に至るものである。このため、松前付近に補給拠点をおくことが望まれた。
もう一つ、戦勝でメキシコ付近での艦隊の必要性が低下し、海軍は組織規模維持のため東インド艦隊の役割を拡大する必要が生じたためであった。

次に、万延元年遣米使節（1860 年）は、幕府が日米修好通商条約批准書交換のために 1860 年に派遣した 77 名から成る最初の公式訪問団である。本書にあるようにこの咸臨丸には軍艦奉行並であった木村喜毅を軍艦奉行に昇進させ、咸臨丸の司令官を命じた。乗組士官の多くを、勝海舟をはじめとする海軍伝習所出身者で固めると共に、**ジョン**万次郎を通訳に選んだ。また、**福沢諭吉**が木村の従者として乗船している。勝海舟は船酔いがひどく、ほとんど船室にこもっていて全く役に立たなかったと多くの書籍に記されている。

薩長の志士の出てこない幕末小説もある意味、新鮮であった。